

ペンテコステの日

「五旬節の日、信者たちは皆、一つの場所に集まっていた。すると突然、天から激しい暴風のような音がして、彼らが座っていた家全体を満たした。そして、炎のような、あるいは火の舌のようなものが現れ、一人一人の上に留まった。すると、そこにいた人々はみな聖霊に満たされ、聖霊が彼らに与えた力によって、異国の言葉で話し始めた。」

使徒行伝 2:1-4

キリスト教世界では、一般的に三つの傑出した出来事が信仰の基盤として認識されている。すなわち、母マリアによるイエスの奇跡的な誕生、カルバリの十字架におけるイエスの死、そして「三日目」に神の霊的な性質へと復活したイエスである。キリスト教徒にとって極めて重要な第四の出来事がある。しかし、それは本来あるべきほど深く評価されていない。それは、イエスの復活から50日後に起こった「ペンテコステの日」である。本稿では、キリスト教信仰の歴史におけるこの特別な日の起源、背景、そして何よりもその意味について考察することを目的とする。

「ペンテコステ」という言葉は聖書の中でわずか3回しか見られず、ギリシャ語であるため、新約聖書にのみ登場します。最もよく知られている用例は、冒頭の聖句に見られます。この言葉は、後に使徒行伝20章16節でも用いられています。「パウ

口は、アジアで時間を費やすことを避けたかったため、エフェソをして航海することを決めていた。なぜなら、もし可能であれば、ペンテコステの日にエルサレムに到着したいと急いでいたからである。」この言葉の最後の用例は、コリント人への第一の手紙**16章8節**にあります。「私はペンテコステの祭りの間、ここエフェソに留まるつもりです。」これら後者の二つの箇所からは、ペンテコステが、使徒行伝**第2章**に記されている聖霊の降臨に関する注目すべき出来事以上のものだったことが示唆されています。ペンテコステは、旧約聖書に記述されているユダヤ人の祭日の一つとしてその起源を持っています。

旧約聖書の祭り

新約聖書の時代に「ペンテコステ」として知られるようになったものは、イスラエルの三つの年次祭りの一つであった。旧約聖書では、それは「収穫の祭り」と「七週の祭り」という二つの名称で呼ばれていた。出エジプト記**23章14～16節**では、「収穫の祭り」という名称で次のように記されている。「あなたは一年に三度、わたしのために祭りを祝わなければならない。あなたは種なしパンの祭りを祝わなければならない……。また、収穫の祭り〔ペンテコステ〕、すなわち、あなたが畑に蒔いた労働の初穂を祝わなければならない。そして、年の終わりに、あなたが畑から労働の成果を収穫した時の、収穫の終わりの祭りを祝わなければならない。」

この祭りに関して言及されているのは、申命記**16章9節、10節、16節**でもあり、そこでは「七週の祭り

」と呼ばれています。「収穫の時期に穀物の刈り取りを始めた日から七週間を数えなさい。そして、あなたの神、主を称えるために収穫の祭りを祝いなさい。主から受けた恵みに応じて、自発的な献げ物を主のもとに持って来なさい。……イスラエルのすべての人は、毎年、この三つの祭り、すなわち、種入れぬパンの祭り、収穫の祭り、仮庵の祭りを祝わなければならない。これらの各の機会に、すべての人は、主なるあなたの神が選ばれる場所に現れなければならない。しかし、主への献げ物なしに、主の前に現れてはならない。」七週の祭りは、出エジプト記34章22節と民数記28章26-31節の2か所でも言及されている。

レビ記第23章では、五旬節がいつ行われたのか、その目的、そしてなぜ「収穫の祭り」と「七週の祭り」という二つの名称で呼ばれたのかについて、詳細に説明されています。5～7節には次のように記されています。「第一の月の十四日の夕べは、主の過越の祭りである。また、その月の十五日は、種入れぬパンの祭りである。……初日〔種入れぬパンの祭りの初日——第一の月の十五日〕には、聖なる集会を開かななければならない。その日には、いかなる労役もしてはならない。」この「種入れぬパンの祭りの初日」は、「聖なる集会」、すなわち特別な安息日となるべきものでした。安息日とは、イスラエル人が労役を行わない日でした。この場合、それは毎週の第七日の安息日ではなく、特別な安息日、すなわち主への聖なる集会でした。

レビ記**23章10節、11節**を続けて読むと、「イスラエルの子らに告げて、彼らに言え。あなたがたが、わたしがあなたがたに与える地に入り、その収穫を刈り入れるとき、あなたがたは収穫の初穂の束を祭司のもとに持って来なければならない。祭司はそれを主の御前で揺り動かして、あなたがたのために受け入れられるようにする。安息日の翌日に、祭司はそれを揺り動かす。」イスラエルの穀物収穫の初穂であるこの束、あるいは一握りの穀物を「揺り動かす」ことは、前述の通り、**15日**である特別な安息日の「翌日」、すなわち**第1月の16日**に行われることになっていた。

レビ記**23章15、16節**には次のように記されている。「安息日の翌日、すなわち、あなたがたが特別な供え物として捧げる穀物の束を携えて来る日（第一の月の**16日**）から、七つの完全な週（**49日**）を数えなさい。七番目の安息日の翌日、すなわち**50日後**まで数え続けなさい。そして、主への新しい穀物の供え物をささげなさい。」この**50日目**は「七週の祭り」、すなわち「収穫の祭り」であった。この祭りが「七週の祭り」と呼ばれるのは、祭りの日が、初穂の束がささげられた時から**7週間と1日**を数えて決定されたためである。さらに、ギリシャ語の「ペンテコステ」は「**50日目**」を意味します。ユダヤ暦の各年の計算方法によって、ペンテコステの日付は**5月下旬から6月上旬**の間で変動することがあります。レビ記**23章**の計算に基づく、今年のペンテコステに相当する日付は**2026年5月23日**でした。

イスラエルの祭りの目的

このイスラエルの祭りは、収穫の初穂に対して神に感謝を捧げる祝祭であり、そのため「収穫の祭り」という別名も持っています。これは特別な収穫でした。野菜や果物の収穫ではなく、穀物、具体的には小麦の収穫でした。この収穫の初穂は神に捧げられました。この祭り期間中、多くの供え物が捧げられました。全焼のいけにえ、穀物のいけにえ、酒のいけにえ、罪のいけにえ、そして平安のいけにえなどがあり、これらはすべて、小麦の収穫に対する神への感謝の祝いのために捧げられたものでした。レビ記23章16～20節

この祭りの特別な供え物として、「新しい穀物の供え物」が定められていた(16節参照)。この供え物については、レビ記23章17節に次のように記されている。「あなたがたは、それぞれの住む地()から、上等の小麦粉で作った、酵母を入れたパン二個を携えて来なければならない。これらは主への初穂である。」イスラエル人は、小麦の収穫の初穂から作ったパン二個をささげるべきであった。これらのパンは、収穫の恵みに対する感謝と、主への献身として、主の御前で揺り動かされることになっていた。五十日前に、彼らは神の前で捧げ物を揺り動かしたが、それは初穂のほんの一握りに過ぎなかった。今や彼らは小麦の収穫を本格的に始め、収穫したばかりの穀物で作った二つのパンを主への捧げ物として持ち寄った。彼らの収穫は、すべての小麦が集められるまで続くこととなった。

新約聖書との関連

イスラエルの収穫の祭り、すなわち七週の祭りに詳しく触れる理由は、それが新約聖書のペンテコステと具体的に結びついているからである。まず、この祭りの時期の対応関係に注目しよう。先に引用したレビ記**23章5節**にあるように、第一の月の**14日**はイスラエルの過越の祭りであった。新約聖書において、これは「世の罪を取り除く神の小羊」である、より偉大な過越の小羊としてのイエスの死に対応する。（ヨハネ**1:29**）。イエスの死は、まさにこの同じ日に起こりました。再びレビ記**23章10節、11節**を参照すると、その**2日後**の第一の月の**16日**、初穂の束、すなわち一握りの穀物が主の前で揺り動かされました。これは、過越の小羊としての死から**2日後**に起こったイエスの復活に対応しています。イエスが予告された通り、イエスはユダヤ暦による第一の月の**14日**の一部、**15日**全日、そして**16日**の一部、計三日の間、墓におられました。マタイ**16:21**；ルカ**9:22**

使徒パウロは、コリントの信徒への手紙第一**15章20節**で、イエスは「眠りについた者たちの初穂」であると述べました。イエスは初穂の束、すなわち一握りの初穂であり、神の力強い御力によって死からよみがえり、永遠の命を得た最初の人でした。（コロサイ人への手紙**1:18**）。この初穂の束を「揺り動かす」という象徴的な行為は、イエスの贖いの犠牲が神に受け入れられたことを示しており、その結果として、神の力によってイエスは死からよみがえられました。最後に、初穂であるイエスの復活から七つの安息日と一日、すなわち

五十日を数えると、使徒行伝第2章に記されているように、五旬節の日に至ります。

イスラエルの祭りが小麦の収穫の初穂を神に捧げるものだったのと同様に、ペンテコステの日は、より偉大な初穂、すなわち「霊的な小麦」を神に捧げることを包含していました。忠実なクリスチャンから成る教会は、初穂の群れの一部として含まれることになっていたのです。イエスは初穂のクラスの「最初」の方でしたが、ヤコブの手紙1章18節に述べられているように、教会もまた「ある種の初穂」なのです。黙示録の著者ヨハネも、黙示録14章4節において、忠実なクリスチャンたちを「初穂」として言及しており、彼らを「人間の中から贖われ、神と子羊への初穂となった者たち」と描写している。この教会の奉獻はペンテコステに始まり、そこでは教会が天の父の前に、神に捧げられたものとして象徴的に掲げられ、示されたのである。

ペンテコステの日は、神の計画における三つの極めて重要かつ決定的な出来事の集大成でした。第一は、イエスが十字架上でアダムの身代金として死なれた際に支払われた贖いの代価です。（テモテへの手紙第一 2:5,6）。これら傑出した出来事の第二は、神の力強い御力によるイエスの復活でした。（エフェソの信徒への手紙 1:19-21）。第三はペンテコステの日、すなわち、将来の教会が天の父に献げられた日でした。

ペンテコステの日

ペンテコステの日を取り巻く出来事は数多い。それは単に聖霊が教会に臨んだ日というだけではない。確かにそのような出来事はあったが、その恵みは当時そこにいた人々だけでなく、それ以来の全期間を通じて、自分の人生を神に受け入れられる形で献身した人々にも及んでいる。

イエスに生涯を捧げていた、上階の部屋に集まった**120**人の弟子たちにとって、ペンテコステの日は多くのことを意味していました（使徒行伝**1:15**）。それは、神が彼らによる神への献身を受け入れられたことを意味しました。それは、彼らが今や神の御前で義と認められたことを意味しました。それは、今こそ彼らの犠牲の生活が始まることを意味し、また、聖霊による新生が成し遂げられたことを意味しました。その結果、彼らは今やキリスト・イエスにある新しい被造物となるのです。ローマ**5:1**；**12:1**；ペテロ第一**1:3**；コリント第二**5:17**

ペンテコステの日は、今日に至るまで、すべての真のクリスチャンにとって極めて重要な意味を持っています。それは、「キリスト・イエスにある神の尊い召し」の始まりを告げるものでした（ピリピ**3:14**）。また、ペンテコステは、教会という集団が、神の「王なる祭司」となるべく、油注ぎ、すなわち奉獻を受けたことを示すものでもありました。（ペテロの手紙第一 **2:9**）。それは、その祭司職の将来の構成員となる一人ひとりが、上階の部屋で人々が受けていたもの——すなわち、神による彼らの献身の受け入れ、義認、犠牲の始まり、そして聖霊による新生——を受ける機会が今や

開かれたことを示していました。ペンテコステ以来、王なる祭司職の将来の構成員は皆、当時起こった出来事によって、その同じ関係に入っています。

ペンテコステにおいて、教会を起点として、人間を神との調和と恵みの関係へと回復させるプロセスが始まったと言ってもよいでしょう。実際、ペンテコステの日は、イエスによって提供された身代金の恵みを、神が人類に帰属させてくださったことの、人類に対する最初の外的な証拠でした。
ローマ人への手紙 4:16-25

聖霊

聖霊の注ぎを理解することは、ペンテコステの完全な意義を把握する上で鍵となります。聖霊とは何でしょうか。一般的に言えば、聖霊とは神の見えない力と影響力です。それは常に存在してきました。神は永遠から永遠までおられるので、神の力と影響力、すなわち聖霊もまた、永遠から永遠まで存在します。

しかし、献身的なクリスチャンにとって、聖霊にはさらに深い意味があります。彼らにとって、聖霊とは、「キリストにある」彼らの新しい命に命の火花を与え、養い、支配する、神の聖く正しい影響力と力であると定義できます（Ⅱコリント5:17）。「霊」という言葉はギリシャ語の「プネウマ（pneuma）」に由来し、「息」を意味します。クリスチャンにとって聖霊の定義を簡潔に言えば、それは肉体の「命の息」に例えることができます。肉体には物理的な命の息が必要です。もしその

息が肉体から奪われれば、数分以内に死んでしまいます。同様に、聖霊——すなわち神の聖なる、（神の性質にふさわしい）義なる影響力——がなければ、キリストにあるクリスチャンの新しい命は生き続け、発展し、成熟へと成長することはできません。

ペンテコステにおける聖霊

使徒行伝第2章は、聖霊の賜物に関するペンテコステの日の出来事を記しています。2～4節には次のようにあります。「すると、天から激しい風の吹き荒れるような音がして、彼らが座っていた家全体に響き渡った。そして、炎のようなもの、あるいは火の舌のようなものが現れ、一人一人の上に留まった。そして、そこにいた人々はみな聖霊に満たされ、聖霊が彼らに語らせるままに、異言を語り始めた。」

なぜ神は、聖霊の賜物として、「天からの音」、「激しい風の吹き荒れるような音」、「炎や火の舌のようなもの」、そして異言を話すこととといった、このような外的な現れを与えられたのでしょうか。これには二つの理由がありました。

第一に、それはそこにいた人々への証しでした。この記述には、「天の下のあらゆる国から、敬虔なユダヤ人がエルサレムに滞在していた」とあります。多くのユダヤ人が、祭りの日であったためエルサレムを訪れていました。聖霊の注ぎによって使徒たちが働かされ、異言を語り始めた（あるいは、異言が理解され始めた）とき、それはそこに集まっていたすべての人々への証しとなったの

です。（使徒行伝2:5,6） 多くの人々は驚き、これらの出来事が何を意味するのかと不思議に思いました。他の人々は、使徒たちが酔っているのだと非難しました。これを受けてペテロは立ち上がり、群衆に向かって語りかけました。彼は預言者ヨエルと詩篇を引用し、イエスを中心とした神の計画について美しい証しをしました。（使徒行伝2:12-40）。その証しの結果は、使徒行伝12:41に記されています。「その日、三千人ほどが彼らに加わった。」

第二に、ペンテコステにおける聖霊の賜物は、神の被造物の中でかつて見られなかったような、神の力と影響力の現れであった。この力は、使徒たちに様々な「賜物」が与えられたという点で、特別な形で彼らに宿った。使徒パウロは、コリント人への手紙第一12章28-30節において、これらの賜物の一部を次のように挙げています。「癒しの賜物、助ける賜物、統治する賜物、異言の賜物……奇跡を行う者」。これらはすべて、初期教会と使徒たちの権威を確立するために与えられた、聖霊の外的な賜物の一部でした。それらは、彼らに対する神の力と影響力の驚くべき現れであり、彼らに代わって神の権威を明らかにするものでした。

より大きな意義

これらの現れがいかに非凡であり、賜物がいかに刺激的であったとしても、また一日で三千人の新たな信徒が加わったとしても、これらはいずれもペンテコステの最も重要な意義ではありませんでした。ペンテコステのより大きな意味は、聖霊の主要な働き、すなわち内面的な働きに関わるもの

でした。この働きは人の目には見えませんでした。実際、それは「キリストの体」を構成する一人ひとりの信徒の中に、「新しい被造物」としてのいのちを育む働きであったのです。コリント人への手紙第一 12章27節

ペンテコステの日に関連する最も重要な出来事は、聖霊による各弟子への個人的な新生でした。コリント人への第一の手紙12章で、パウロはこの問題について論じています。前の節で霊の様々な賜物について述べた後、彼はコリント人への第一の手紙12章31節で次のように述べています。「（最上の賜物を熱心に求めなさい。しかし、さらに優れた道があることを、私はあなたがたに示そう）。」この「さらに優れた道」こそが、その直後の第13章の主題であり、使徒はそこで愛という徳性にのみ焦点を当てています。愛は御霊の實の総括であり、そこにはキリストにある新しいいのちの成長が示されています（ガラテヤ5:22,23）。これこそが、さらに優れた道であり、聖霊のさらに優れた働きであり、そしてペンテコステの最大の意義であったのです。

聖霊の働き

パウロが「愛」と要約した聖霊の内なる働きは、新約聖書の多くの箇所で言及されています。ローマ人への手紙第8章には、聖霊に関する詳細な論述が含まれており、キリストの信徒たちに多くの啓示と導きを与えています。この章だけでも、「聖霊」あるいは「御霊」という言葉が約20回も登場します。ここで述べられている聖霊の働きは、10の分野に分類することができます。

1. ローマ人への手紙8章1、2節は、聖霊を「律法」、すなわちいのちの律法として語っています。クリスチャンは聖霊——いのちの律法——を持たなければなりません。さもなければ、新しい被造物は死んでしまいます。これらの節には次のように記されています。「それゆえ、キリスト・イエスにある者には、もはや罪の宣告はない。……キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、私を罪と死の律法から解放したからである。」この箇所は、聖霊がいのちの「律法」と述べているだけでなく、イエスの足跡をたどる者たちを、彼らが以前従っていたもう一つの律法——すなわち「罪と死の律法」——から解放したことも示しています。

2. 聖霊は、人が歩み、考える際の力となるものです。ローマ人への手紙8章4～6節は、これを次のように明らかにしています。「それは、肉の行いに従わず、御霊に従って歩む私たちの中で、律法の義が に成就されるためです。なぜなら、肉の行いに従う者は肉の事柄を思い巡らし、御霊に従う者は御霊の事柄を思い巡らすからです。肉の思いは死であり、御霊の思いはいのちと平安です。」

3. 聖霊による新生は、「あなたがたのうちにキリストがおられること、すなわち、栄光の希望」（コロサイ人への手紙1:27）という考えを体現しています。ローマ人への手紙8章9節、10節はこれに言及し、次のように述べています。「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉にあってはいないが、御霊にあっています。もしだれでもキリストの御霊を持っていな

いなら、その人はキリストのものではありません。また、もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、体は罪のために死んでいるが、御霊は義のためにいのちである。」この神の聖霊、あるいはパウロがさらに言及している「キリストの御霊」は、その信徒たちの「うち」にいななければならない。キリストが文字通り私たちのうちにおられるわけではない。私たちの心の中にあり、私たちを動かすのは、キリストの生み出す御霊、すなわちキリストの影響力である。ヨハネの手紙第一 2:27

4. 聖霊の第四の働きは、ローマ人への手紙8章11節に次のように記されている。「もし、イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリストを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死すべき体をも生かしてくださる。」聖霊は「生かす」——すなわち、命を与えるのです。それは、神に仕え、神の真理を理解し、受け入れられるいけにえとなる機会を人々に与え、最終的には、死に至るまで忠実な者たちに「いのちの冠」を与えるのです。黙示録2:10

5. 私たちの心に対する聖霊の働きは、墮落した肉の行いを「死に委ねる」、すなわち死に至らせることを助けてくれます。ローマ人への手紙8章13節には、「もしあなたがたが肉に従って生きるなら、死ぬことになる。しかし、もしあなたがたが御霊によって肉の行いを死に委ねるなら、生きるようになる」とあります。

6. 聖霊のもう一つの働きは、ローマ人への手紙8章14節に記されています。「神の御霊に導かれる者は、みな神の子です。」聖霊はクリスチャンを導き、指し示します。これは、神が御自分の従う者たちに対して示される摂理的な御手配と考えることができます。聖霊は、狭い道の各段階において従う者たちと共に歩むことによって、この御手配を実現されるのです。ある賛美歌の作詞家は、「光の中を独り歩くよりは、神と共に暗闇を歩むことを選ぶ」と記しています。神の民がこう言えるのは、彼らの人生を導き、指し示すのが聖霊——すなわち神の摂理的な働きと力——であるからです。

7. 聖霊による新生は、子としての身分を確かなものとする保証です。ローマ人への手紙8章15節には、「あなたがたは、再び恐怖に陥る奴隷の霊を受けたのではなく、養子としての霊を受けたのです。それによって、私たちは『アバ、父よ』と叫ぶのです。」と記されています。聖霊は、キリストの従者たちに、彼らが神の子であることをどれほど確かな保証として与えてくださるでしょうか！

8. ローマ人への手紙8章16節には、「御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子であることを証ししてくださる」とあります。これは、献身によって主に奉献された私たちの霊、心、動機が、いわば神と同じ「波長」にある、すなわち聖霊と共に「証し」をしているという主張です。これらが共に証しをする時、それは、神が聖霊を通して私たちに意図しておられるのと同じ目的を、私たちも持っているという宣言なのです。

9. 聖霊は、私たちが肉体に宿っている間、現世の試練や「うめき」を分かち合うことを妨げることはありません。確かに、神の力はあらゆることを成し遂げることができ、神は聖霊を用いて、私たちが試練や肉のうめきを経験することを防ぐこともできたかもしれませんが。しかし、それは私たちの最善の利益には（適さない）のです。聖霊のこの側面は、ローマ人への手紙8章23節に示されています。「私たち自身、御霊の初穂を受けた者として、御子の身分に受け入れられること、すなわち、私たちの体の贖いを待ち望みながら、心の中でうめき声をあげているのです。」

10. ローマ人への手紙8章26、27節にはこうあります。「御霊もまた、私たちの弱さを助けてくださいます。私たちは、どのように祈るべきかを知りません。しかし、御霊ご自身が、言葉に表せないうめきをもって、私たちのために執り成してくださいます。そして、心を探られる方は、御霊の思い（ギリシャ語：志向）がどのようなものであるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神の御心に従って、聖徒たちのために執り成してくださるからです。」聖霊は、私たちの霊と共に証しをなさることで、私たちが望むように父なる神に祈ることが難しい時や、何を祈るべきか分からない時に、私たちを助けてくださいます。この聖句が述べているように、聖霊は「神の御心に従って」執り成してくださるのです。

御霊に満たされる

使徒パウロは、御霊を「消してはならない」——すなわち、新しい被造物としての命を与える力を

故意に拒んではならない——と私たちに警告しています（テサロニケ人への手紙第一 5:19）。この点に関しては、たとえわずかな自己中心的な態度であっても警戒しなければなりません。パウロはエペソ人への手紙4章30節で、「神の聖霊を悲しませてはなりません」と述べています。むしろ、私たちは神の影響力と力を可能な限り最大限に受け取るよう努め、「御霊に満たされる」べきです（エペソ5:18）。こうして、「死に至るまで」忠実であることによって、私たちはペンテコステの意義と、イエスの犠牲、苦難、そして天の父への奉仕という足跡に従うために人生を捧げたクリスチャンたちにもたらされる祝福を、真に理解することができるのです。